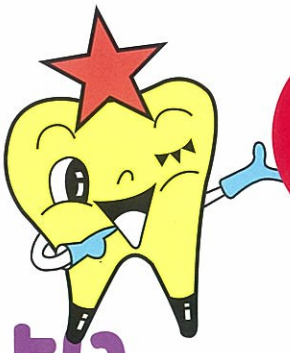
夢みるこども基金だより



No. 5

〈平成12年〉
10月20日

発行:夢みるこども基金事務局

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-6 赤坂Sビル2F ☎ 092-751-0021 FAX 092-751-0249

2000 夢みるこどもキャンペーン

第六回イベント

アフリカの大地に根付け こどもたちの願い

▲キビやアワなどを収穫する子供たちと河野理事長代行、アグネス・チャン理事ら

歯の金属冠リサイクルでこどもたちの夢をかなえ、福祉にも役立てようと活動を続けている「夢みるこども基金」(理事長・白田貞夫日本歯科医師会会長)の6回目のイベントが8月6日、福岡県宇美町宇美の農業・松田好充さん宅で開かれた。

今年のメーンテーマは「アフリカの大地に根付けこどもたちの願い」。全国の小、中学生から「私のかなえたい夢」として募った2415点の作文とイラストの中から最優秀賞に選ばれた福岡市の福岡教育大付属福岡小5年・野崎百合那さん(10)の作文をもとにイベントが実現した。

当日は、春休みに、このイベントを決めた「こども会議」のメンバーや福岡市などに在住の外国の子供たち、地元の子供たち、それに基金から理事のアグネス・チャンさん、理事長代行の河野博之福岡県歯科医師会会長ら計140人が参加。

貧困にあえぐアフリカ・スーダンの子供たちのために、松田さんから提供して頂いた5アールの畑に植えていた、キビ、アワ、カボチャ、キュウリの種を収穫した。

引き続き、松田さん宅の庭に特設したステージで「世界こども音楽祭」が開かれ、日本、アメリカ、フィリピン、韓国、中国の5カ国の子供たちが歌や民族舞踊、器楽演奏などを披露し、交流を深めた。

地元の人たちのボランティアによる竹馬や竹トンボ作り、ソーメン流し、バーベキューなどがあり、子供たちは野趣たっぷりの楽しい1日を過ごした。

収穫したアワ4・70kg、キビ1・15kg、カボチャ1・85kg、キュウリ100gの種は国連児童基金(ユニセフ)を通じてスーダンに送られる。また、現地の子供たちのために古着(コンテナ1個分)も別便で送る。

一方、竹馬と竹トンボは福岡市内の施設の子供たちにプレゼントした。

全国の歯科医師会などの協力で一九九四年(平成六年)に福岡市で始まったキャンペーンは、日本歯科医師会を始め、多くの人たちの全面的なバックアップで子供たちの夢を育み、その夢を大きく膨らまし、21世紀を迎える。

世界こども音楽祭で太鼓を披露する地元の子供たち

4月に種まき

毎年、全国の子供たちから寄せられる夢はいろいろ。今年はなぜか、飢饉にあえぐ世界の子供たちを救いたい、というのが多かった。子供たちが世界へ目を向けていることはうれしいこと。さらに、世界の子供たちと音楽祭を開きたい、という夢もあった。

今年のイベントになった、アフリカへ種を贈るといっても、その種を作るための畑が必要。事務局も、子供たちの夢実現のために畑探しに取りかかった。

偶然にも、理事の一人、アグネス・チャンさんから、耳寄りな情報を得た。

あるテレビ番組で、アグネス・チャンさんが福岡県宇美町の農家を尋ね、楽しい一夜を過ごしたことを聞き、四月のこども会議のあと、すぐに、その、松田好充さんに畑を借りることをお願いしたところ、即座に了承していただいた。広い畑はもちろん、イベント当日、広い庭先を利用して、世界音楽祭も開催することも承諾していただいた。時間がない。すぐにとりかからないとアフリカへ送り出す、作物の種が間に合わなくなる。

アフリカの大地で根付き、大きく育ち、みんなの食料として役立つ作物となれば、限られてくる。やせた大地にも、めげずに根付いてくれる作物はどんなものがあるかを調べることから手がけ、そしてこれをいち早く、地元の人たちの協力で松田さんの畑に植えた。

キビ、アワ、カボチャなら、どんなやせた土地でもちゃんと実り、食料として大勢の人たちの空腹を満たしてくれる。狙いは間違いなかった。松田さんの畑では、あっという間に、大きく育った。

育った種の実が、そろそろカラスに狙われ始めたころ、待ちに待った今年の「夢みるこどもキャンペーンのイベント」の日、八月六日がやってきた。

地元の人たちが大活躍

松田さんの好意で、この日は、近所の奥様方がボランティアに出ていただき、全国から集まってくる子供たちに、バーベキューやソーメン流しを用意してもらった。

さらに、同じ近所の男性の方々は、竹やぶから竹を切り出し、子供たちに遊んでもらおうと、竹馬、竹トンボなどを工作してもらい、庭先に世界音楽祭らしく、ミニステージも特設した。

準備が着々と進められているころ、新幹線や飛行機で、全国から子供たちが集まった。

それぞれに優秀な、夢の作文やイラストで選ばれ、今年四月、福岡市で開かれたこども会議に出席した十六人だ。

アグネス・チャンさんも、福岡空港に降り立ち、松田さん宅へ。

午後二時、セレモニーは始まった。こども会議の面々だけではない。地元から十数人、さらに、世界音楽祭に出演してくれる外国の友達も姿を見せた。

炎天下で作物の収穫

まず、松田さんの畑で、こども会議に出席した子供たちが、アグネス・チャンさんや河野博之理事長代行らとともに、アフリカへ送るためのアワやキビ、カボチャ、キュウリを収穫した。

青空の下、広い畑では、作物が収穫を待ちわびていたように、どれも背丈が伸びきっている。といっても、子供たちは収穫の方法を知らない。松田さんの指導で、それぞれ白い手袋をつけて、「こうやってもぎ取ればいいのですか」などと質問を浴びせながら、楽しげな表情で動き回る。流れ落ちる汗を拭おうともしない。

こどもたちの交流深まる

そのあと、庭先のステージに戻り、司会者とアグネス・チャンさんとの軽妙なやりとりで、最初は緊張気味だった子供たちも、だんだんとうち解けて、元気な声が広がる。

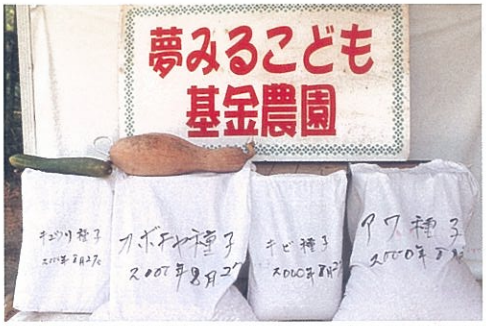
これまで見ず知らずの間でも、子供たちはすぐに手をつなぎ、歌い、踊り、自分の得意なものを披露した。

中には、飛び入りで、日頃練習している空手の型を実演してくれた子供もいた。

ソーメン流しとバーベキューでお腹が大きくなったあとは、竹馬や竹トンボで元気に遊ぶ。時間が過ぎて行くのも忘れて、心ゆくまで夏の日のひとときを楽しんだ。

最後に、山崎大地君（千葉県）と上野彰子さん（福岡県）が、「私たちの夢が、たくさんの人たちの協力で実現した。歯科医師の先生たちを始め、多くの人たちのご協力を得て、キャンペーンの輪をさらに広げ、21世紀を夢と思いやりにあふれる時代にしたい」とのこども宣言を読み上げ散会した。

竹馬乗りに挑戦する子供たち



アフリカに贈るために収穫したカボチャ、アワ・キビ、キュウリの種子

施設の子供たち大喜び

福岡市東区三苦の児童養護施設「和白青松園」（江中宣夫園長）に七日午前、事務局スタッフ、ボランティア六名が訪れ、竹細工（竹馬、竹とんぼ）とお菓子をプレゼントした。

同園には、家庭的に恵まれない幼児や小、中、高校生約百人が入所している。今年は、初めて同園の子供たちからも夢についてのイラストや作文の応募があった。このような中、今回のイベントに参加してくれた山本航世君をはじめ、一行の到着を待ちわびていた子供たちが、竹細工などを手に来園した一行を盛大な拍手で出迎えた。

贈呈は同園内の食堂で行われ、古市悟・夢みるこども基金顧問がキャンペーンの趣旨と竹細工プレゼントまでの経緯を説明。事務局スタッフが学園側代表の小学生十人に竹馬、竹とんぼを手渡すと、子供たちは今にも運動場へ飛び出して行きそうなほど、みんな大喜び。

子供たちは「また来年のコンクールに絵や作文を応募して夢をかなえたい」と目を輝かせていた。

和白青松園の子供たちに竹馬や竹とんぼの贈呈式

2000 夢みるこども キャンペーン

―こども宣言―

私たちの大きな夢が、たくさんの人たちの共感と協力でさらに大きくふくらみ、今日、全国の子供たちが福岡県宇美町に集い、「夢みるこどもキャンペーン」の第六回イベント「アフリカの大地に根付け　こどもたちの願い」を開きました。

十六人の「こども会議」のメンバーの他、フィリピンやアメリカなどの子供たち、そして地元の子供たち。

ほとんどの人が初めての出会いでしたが、私たちはすぐに仲良くなることができました。

なぜならば、みんなが同じ思いやりの心をもって、厳しい環境にいるアフリカの子供たちのことを思い、またみんなが夢を抱き、お互いの大きな夢を尊重しあっているからだと思います。

私たちは今日、緑豊かな大自然に恵まれたここ宇美町に集い、実感したことがあります。

それは、たとえ暮らす環境や言葉、文化が違っても、私たちがこの地球上で生きている以上、みんな仲間なのだということです。

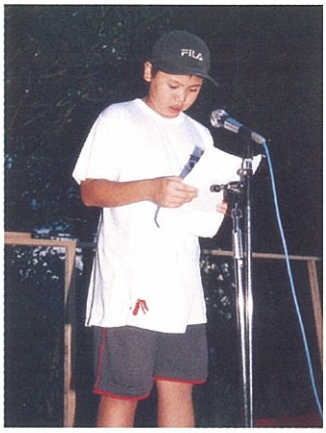
私たちは一人では生きていけません。友達や家族など、多くの人々に支えられていることを私たちは決して忘れてはいけません。

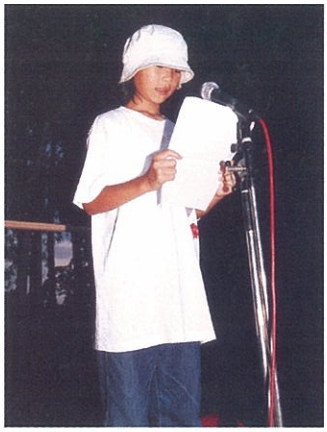
夢みるこどもキャンペーンは今日一日だけのものではありません。歯科医師の先生たちを始め、多くの人たちのご協力を得て、キャンペーンの輪をさらに広げ、一人でも多くの人たちと手を取りあって、一緒に大きな夢を育て、すぐそこまで来ている二十一世紀を「夢」と「思いやり」にあふれる時代にしたいと思います。

二〇〇〇年八月六日

第六回　夢みるこどもキャンペーン

「アフリカの大地に根付け　こどもたちの願い」参加者一同





こども宣言を読み上げる代表

第6回こども会議

バーベキューを楽しむ参加者たち

ソーメン流しを楽しむ子供たち

民族舞踊を披露するフィリピンの子供たち

世界こども音楽祭の観客席

子供たちにスピーチするアグネス理事

アフリカに贈る種の目録贈呈

全員で記念撮影

韓国の子供たちの太鼓

夢みるこども基金から助成金を受けた三団体の活動報告

ネパールで治療した患者二万人を突破

ネパール歯科医療協力会
理事長　中村　修一
（九州歯科大学助教授）

世界の最貧国（LLDC）の一つに数えられるネパールは人口約2千万人に対し歯科医師が約百名しかいません。さらに歯科大学がないので歯科医師を育成することができない状況です。虫歯の数は日本に比べ少ないのですが、歯科医師が皆無状態ですので治療を要する歯牙の保有数は日本に比べはるかに多いのです。また歯周病の罹患率は劣悪であり、人道的に国際援助が必要です。私達は1989年から現地の要請に応え国際医療保健協力を始めました。その後、継続的に活動を進め今日までに十三回のミッションを現地派遣しました。派遣隊員は述べ二九八名、現地で二万二五六人の村人に歯科治療や健康教育を行っています。

現在は自立型歯科保健をめざしています。1994年から開始した村の学校の先生を対象とした現地口腔保健専門家の要請プロジェクトで、これまでにテチョー村とダパケル村とアネコット村の村の全ての小学校の先生を対象に専門教育を実施しました。その結果、村の全ての小学校で健康教育が展開されるようになりました。また、私達の活動は単なる機材や資金の援助ではなく、隊員が現地に出かけ直接村人にかかわる「顔の見える国際協力」を展開しています。

今年も十四次隊員を派遣すべく準備中で1）歯科検診、2）学校歯科保健での展開、3）地域歯科保健、4）テチョー村とダパケル村での歯科健康大会、5）テチョー村ヘルスプロモーションセンター屋根修理など実施する予定です。

今年も夢みるこども基金からの援助金をいただくことになりました。関係者一同心から感謝しています。援助金は小学校での歯科保健活動に必要な資金として利用させていただきます。

「夢みるこども基金学校」完成

バングラデシュと手をつなぐ会

ラフマン・モクレスール
（博多高等学校・英語教師）

バングラデシュ・カラムディ村に建設を進めていた「夢みるこども基金学校」が完成、1999年12月30日深い霧に覆われた朝、地域住民や116人児童生徒の熱い希望に応える約束の中、「夢みるこども基金学校」の開校式が行われた。あれから8か月過ぎた今日、子どもたちはどうしているか、元気に学校に通っているか、地域からどんな評価を受けているだろうか。

今年7月26日昼頃、バングラデシュと手をつなぐ会の7人の現地訪問参加者と一緒に学校の様子を見に行った。雨期の最中、私たちが学校に着くと、子どもたちからとても温かい歓迎を受け、子どもたちの元気な姿を見て感動した。その後、どのクラスの生徒たちも「日本人が自分たちの教室に来て欲しい」、「一緒に遊んで欲しい」、「自分たちの用意した作品など見て欲しい」という願いがあった。各教室に行ったが、時間が余りなくばたばたして帰ってきた。子どもたちの不満な顔がはっきりと見えた。訪問団が帰国後、私（ラフマン）は一人で何度かその学校に足を運び、子どもたちと遊んだり、先生たちと話したり、保護者たちと懇談会をやったりした。

始まったばかりの学校だからもちろん問題もたくさん抱えている。先生たちは一生懸命にがんばっている反面、みんな初めてのことなので教授法や学校運営などについて知らないことがいっぱいある。しかし経験よりも若さを武器にして彼らは開校当時の約束を果たそうとしている。

完成した夢みるこども基金学校

現在、4つのクラスに4人しか先生がいない。誰かが年休を取ると、他の先生や子どもたちは困る。また音楽や美術の先生もいない。図書館ももちろんない。小学校が完成するには後2クラスが必要。保護者の中から、来年自分たちの子どもが進級してこの学校で勉強できるのかという心配の声もよく聞こえた。これらの問題をどう解決するのか、重い責任を肩にして8月末に福岡に戻ってきた。

各方面の人たちと、現地の人たちの期待に沿えるよう、これからも頑張って行くが、夢みるこども基金の援助にはいつも感謝しています。

授業をうけるカラムディ村の子供たち

福岡・ニルマルポカリ小学校 ―その後―

福岡・ネパール児童教育振興会
会長　篠隈　光彦

「ネパールの子供に教育のともしびを」をテーマに一九九九年七月、ポカラの近郊に開校した「福岡・ニルマルポカリ小学校」ですが、一年を経過し、本年七月、新入生が三十一名増え、全校生徒百五十名となりました。

従来までの生活パターンに変わり、学校生活が主となった在校生百十九名のこの一年は、日本の同年代の子供たちとは比較にならない大変厳しい生活環境だったようです。

このニルマルポカリ村のほとんどの家庭は自給自足が原則なのですが、収穫するためには子供も立派な労働力です。そのために学校を休むことは当然のことで、加えて衛生的な飲料水を確保できず病気になったり、最悪なパターンでは経済的理由で自らが家を離れて働かなければならないケースなどがあり、結果、留年する子が大勢生じてしまいました。

ネパールの田舎ではこの現象が常識的な教育状況であるらしく、この国では小学校でさえ卒業することの難しさを改めて痛感いたしました。

現在、校長先生が中心になり学校スタッフの意識を高め担任の責任としてフォローしていますが、子供たちにとって学校が楽しい場となるようにも計画しています。ピクニックや社会見学、そしてグランド整備をして運動会も実施する予定です。

ともあれ、脱落者がほとんどいない形で初年度を終えたことをご報告いたします。

昨年に引き続き本年も貴基金様から賛助金を頂戴いたしました。責任を持ちまして子供たちのために有意義に役立てることをお約束いたします。

二十一世紀を担う子供たちのために私にできることがあり、その活動の仲間であることをうれしく思います。

持山先生、天国で子供たちを見守って

前夢みるこども基金理事代行
前福岡県歯科医師会会長
平成12年3月6日死去・享年72歳

故 持山彌之助氏

その日、私は自らの心の動揺に驚いた。

持山彌之助先生の訃報に接し、当時在籍していた読売新聞徳山支局（山口県）から、福岡市中央区古小烏の斎場であった通夜に駆けつけた時のことだった。新幹線の中でも、先生のことをあれこれ考えながら、弔問に訪れたのであったが、感情が激することはなかった。それが、会場に入り、遺影のまえで焼香の列に加わると、言いようのない悲しみが全身を襲い、思わず、涙がこぼれた。

告別式の日もそうだった。通夜でお別れしたから、もう感情的になることはあるまいと思っていたのだったが…。持山家と福岡県歯科医師会の合同葬。葬儀委員長の河野博之・同県歯科医師会会長（現・夢みるこども基金理事長代行）が弔辞を読んでおられる時だった。波を打ったような静けさで、厳粛な会場に、突然、嗚咽する声が聞こえた。それが自分の声だった。こらえようとしたが、椅子に座した身に震えが起き、身を揺すぶるような悲しみは収まらなかった。

その時、いかに、先生が自分の心の中で大きな存在だったかを思い知らされた。それは「夢みるこども基金」の発足から、今日に至るまでの道のりと重なるのである。

私が先生とお会いしたのは昭和六十三年のころ。当時、私は読売新聞福岡総本部社会部の医療担当記者だった。何回か取材させていただき、旧知の間柄となった平成六年、歯の金属冠リサイクル・キャンペーンを立ちあげることになり、相談したことが、深い信頼関係に結ばれる仲となった。そのキャンペーンこそ、「夢みるこどもキャンペーン」である。

当時、このキャンペーンはまだ、海の物とも山の物とも知れぬ状態で、視界不良。だが、福岡社会部の責任者で、私の上司の古市悟・社会部次長（当時。現・スポーツ報知西部本社取締役編集部長。夢みるこども基金顧問）とともに、福岡県歯科医師会に後援をお願いに行くと、持山先生は、「いいよ」と快諾してくださった。それを機に、全国の歯科医師に後援の輪が広がっていった。基金理事長に中原爽・日本歯科医師会会長、理事長代行に持山先生になって頂いて、「歯の金属冠リサイクルで、二十一世紀を担う子供たちの夢をかなえる『夢みるこども基金』」はスタートしたのである。

第一回のこども会議を福岡県歯科医師会館で開いた時、全国から集まった子供たちを前に、目を細めておられた持山先生を思い出す。以来、応募された作品の審査、こども会議、夢実現のイベントなど、どこでも、やさしい目を子供たちに向けておられた。

その優しさはどこにあるのだろうと、考えたことがある。

先生は山口県長門市仙崎の出身で、この地からは近年、注目を集めている童謡詩人、金子みすゞがでている。また、シベリアシリーズで有名な画家、香月泰男は先生のいとこだ。山口県三隅町にある香月美術館には、香月が子どものために作ったおもちゃや絵があり、人気を集めている。先生の優しさはみすゞや香月の持つ優しさと根っこが同じのような気がした。山口の豊かな自然に培われた優しさだと思う。

子供たちに夢がなくなって久しい。子供が起こす最近の事件には、声もない。解決は容易ではなく、考え込んでしまう。だからこそ、今、子どもたちに夢を見る機会を与えることが必要だと思う。「夢みるこども基金」はその時代的要請にこたえてきた。持山先生はその大黒柱だった。子どもにとって、キャンペーンを通じて二層身近な存在になりつつある「歯医者さん」。その代表として、先駆けとして、先生は子どもに夢を与えるキャンペーンに尽くされた。

お疲れ様でした。持山先生、天国で、子供たちを見守っていてください。

（発足時の事務局員、
現読売新聞久留米支局長・藤野　博史）

夢みるこども基金理事長
日本歯科医師会会長

臼田 貞夫

歯の金属冠リサイクルで、次の世代を担ってくれる子供たちの夢をかなえ、併せて福祉にも役立てようとスタートした夢みるこどもキャンペーンは七年目を迎えました。

キャンペーンの運営推進母体の「夢みるこども基金」の理事長に、中原爽先生に代わり、私が就任いたしました。各方面から「ユニークなキャンペーン」と注目されたこのキャンペーンも全国の歯科医師の先生方のご協力で、年々、成長を続けています。

毎年、正月に全国の子供たちから「私のかなえたい夢」を作文とイラストで募り、春休みに「こども会議」を開いて実現させる夢を決定。夏休みにその夢を実現させるイベントを行っています。

ご存知の方も多いと思いますが、第一回の阪神淡路大震災で両親を亡くした子供たちを熊本県阿蘇に招いての「阿蘇こども出会いの里」から、今年の食糧不足に悩むアフリカ・スーダンの子供たちのためにカボチャ、アワ、キビの種子を育て、現地に送る「アフリカの大地に根付け　こどもたちの願い」まで、毎年、子供たちの純粋な心から生まれたイベントを展開。バングラデシュには「夢みるこども基金学校」も建設。これまで勉強をしたくても学校がなかった現地の子供たちが毎日、目を輝かせながら登校しているそうです。

これらの事業は、新聞やテレビでも取り上げられ、キャンペーンは子供たちの夢とともに大きく膨らんでいます。

このキャンペーンを支えているのは、不要になった金属冠を基金事務局に送って頂いている歯科医院や大学、診療所などの歯科医師の先生方です。

いつの時代でも、こどもは社会の宝であり、私たちの希望でもあります。私は、希望に満ちた二十一世紀を築くために、もっと多くの方々にこのキャンペーンに加わっていただき、この運動の輪をさらに広げるために、先頭に立って頑張りたいと思います。どうか皆様の一層のご協力を重ねてお願い致します。

ありがとう 中原　爽さん

（前日本歯科医師会会長、
前夢みるこども基金理事長）

夢みるこども基金の理事長としてキャンペーンの先頭に立って来られた中原爽先生が、日本歯科医師会の役員改選で6月にお辞めになりました。

中原先生には「子供たちの無限に広がる夢を、大人も一緒になって膨らまし、希望と潤いのある社会を作りたい」と、キャンペーン参加歯科医院の開拓などに力を注いで頂きました。

その中原先生に、これまで五回のイベントに参加した全国の子供たちから「中原さん、夢をありがとう」の手紙十六通が基金事務局に寄せられました。この手紙は、子供たちから中原先生への「感謝状」として贈りますが、どの手紙にも夢を育むことの楽しさ、生きることのすばらしさ、そして、自分達に夢を持つことと勇気を与えてくれた中原先生とキャンペーンに感謝する気持ちがつづられています。

基金の理事会でも、この手紙の一部を披露しましたが、役員の方たちも「キャンペーンが子供たちにこんな大きな影響力を持ち、人生を形成していくうえで、大きな力になっていることを改めて実感した。このキャンペーンに関われたことがよかった」との声もありました。

手紙の中から、第一回目のイベント「阿蘇こども出会いの里」の提唱者だった福岡県小郡市の長尾怜美さんの分を掲載します。

長尾さんは、イベントに参加した時は、小学四年生でしたが、現在は筑紫女学園高校の一年生です。今年のイベントにも顔を出し「自分たちの妹や弟になる子供たちがとてもかわいかった。もっと多くの人たちが参加できるようにキャンペーンが、大きく成長して欲しい」と話していました。

第一回キャンペーン参加者

長尾　怜美さん からの手紙

早いもので夢みるこどもキャンペーンが行われて早五年の月日が経ちました。私は第一回の時に参加したのですが、当時は小学校四年生でした。阪神大震災が起きた直後にテレビに放映されていた神戸の状況を見て、震災から必死ではいあがろうとする人々とそれを援助するボランティアの人々に感動し、私もそのような人になりたいという思いを作文に書きました。その後、この夢が採用されて、夏には、熊本の阿蘇で神戸や地元の友だちとホームステイをしたり楽しい日々を過ごさせて頂きました。あれから五年、高校生となった私は改めてこのキャンペーンの意味の深さ、そして多くのスタッフの方々により、どうしたら純粋な子どもの夢を叶えてあげられるかと日夜検討しながら作りあげられていることに気づきました。そしてその土台となっているのが、私達の身近な歯医者さんと個人個人の善意により集められた金属冠のおかげだったのです。昨年、記念すべき第五回ということもあり、飛び入りで参加させていただいたのですが、年下のかわいい弟や妹のようなお友だちが、楽しそうに、大きなケーキを作って喜んでいる姿を見て、昔の私をだぶらせていました。夢、それは希望、又は、目標であり、生きる原動力でもあります。私達は、純粋に素直にその夢を作文に託した結果、その答えは、はっきり現実となってはね返って来ました。夢は抱き続ければ、必ずかなうということを多く大人の人々の惜しみない努力によって証明してくださったのです。まるでドラえもんの不思議なポケットのように…。

そして、この先頭にたってくださったのが、基金の理事長でもあられる日本歯科医師会会長の中原爽先生だったのですね。

ちょうどお話の「あしながおじさん」のように陰で私たち子供の夢を持ち上げてくださったのです。しかしこの六

夢みるこども基金理事

アグネス・チャン

少年犯罪が多発し、少年法改正問題もつぎの国会で審議されるようですが、それもこれも、私は子供たちの夢を大人たちが育ててあげようとする姿勢が欠けているからだと考えます。

私は、六年前から始まった、この「夢みるこども基金」の理事として大勢の子供たちに接して、このことを痛感します。

大小に関わらず、子供たちは必ず自分の夢を持って将来を見つめています。ところが、世の中の文明が進むにつれて、それらの夢がいつの間にか大人とともに現実の世界に引き戻され、無惨にも打ち砕かれてしまっているような気がします。

実際に、夢を追う楽しさも、実現させる勇気も知らずに日々を過ごしている子供たちが増えているのではないでしょうか。このような時代だからこそ、基金は精一杯子供たちの夢をはぐくんでいるのです。

今年の夏のキャンペーンは、福岡の郊外の民家で子供たちと楽しい時間を過ごすことができましたが、それも私の願いと子供の夢が見事に一致したお陰だと喜んでいます。

というのは、世界では、まだ年端もいかない子供たちが戦場に駆り立てられていると知り、取材でアフリカへ出掛け、この事実に直面したとき、偶然にも夢みるこども基金の「私の夢」作文が、食糧難に悩むアフリカの子供たちに自分たちで栽培したキビやアワ、カボチャの種を贈りたい、ということでした。

私は感激しました。夢は大人も、子供もありません。大勢の人たちの善意は実り、収穫した種は海を越え、アフリカの大地に根付くでしょう。

夢とは、大切にはぐくみ、実現に向けて努力を続けていくことだと思います。

私は、夢みるこども基金がユニークな存在であり、このような活動は世界的にも貴重であることを今さらながら実感しております。

これからも皆様の一層のご支援をお願いし、大人も子供たちと一緒に楽しく夢を語り合い、実現していこうと思います。私もそのために努力して参ります。

月に退任なさると聞きました。遅くなりましたが、深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

でも人生においてこれからは私たちが自分の手で、自分の力で夢をかなえていかねばなりません。夢は叶うと信じさせていただいたうえで、その信念をもとに自分でその夢に向かって道を開いていかねばなりません。それが実現できてこそ、本当の夢みるこどもキャンペーンの一員であったといえるでしょう。しかし、そう考えると、第一期生の私としてもとても重苦しく夢というものに対して身構えてしまいました。しかし、そんな時久しぶりに阿蘇でのビデオを見てみました。その中で、柔道の山下監督が『早く夢や目標を持つこと。そして、それを継続していくこと』の大切さを何回もおっしゃっていました。その後ろで、古賀選手を始めとする多くの選手たちが夢に向けて全身から汗をふり飛ばしている姿が印象的でした。

答えはここにありました。当時は何気なく見ていたものでも月日を追って見直すと新しく得られるものがあるのですね。夢をもっと広い意味で考えれば、実現するか否かは問題ではなく、夢に向けて努力していく過程こそ大切なのではないのでしょうか。『継続は力なり』ですね。

さらに、努力を怠らなければ夢は向こうから近づいてくるということも発見しました。自分がその方向をはっきり示すと、それに関するものが集まってくるという法則です。不思議です。

昨年の神戸の友達との出会いもそうでした。文通をしている中でいつかまた会える日がくるといいねと話していた矢先のことでした。そしてそこで一つ彼女をより深く知ることができたのです。夜ベットの中に入ってもあかあかと照明を顔に当て、周囲のものが先に寝つくのをとても怖がる昼と対照的な彼女を見て、私の知らないところで、こんなに苦しんでいると知りました。そして、この出来事が今まで心の奥に引っかかっていたものをさらに大きくしました。『私には両親がいる。家族に関することを避けて話さなければ…』そうして、いつも言動には注意してびくびくしていました。そう悩んでいる中、やはり答えは向こうからやってきました。

偶然見つけた弟の国語の教科書の一節、黒柳徹子さんの「ボランティア、はじめの一歩」という文でした。黒柳さんが小さい頃、松葉杖をついている女の子を見て隠れたのです。お父さんに「どうしたの」ときかれ、「私、今あそこにいけないの。あの女の子が私の足を見てかわいそうだから」というとお父さんが、「どうして隠れるの？行ってお話してあげればいいのに」とおっしゃったそうです。しかし黒柳さんは何か自分が悪いことをしているような気がしてそのまま通り過ぎてしまいました。後に、彼女がユニセフの仕事で砂漠を歩いていると「いってお話ししてあげればいいのに」という亡き父の言葉をふと思い出したそうです。一番大切なことはそれだったのかも知れない、姿を隠さずに始めは辛かったのかもしれないけれど、お話してあげればよかったとお父さんの真の言葉の意味がわかったといっていました。

黒柳さんは二つの大事なことをおしゃっています。まず身近なところに気を配って、次に「自分にできそうなことは何か」を考える。自分の能力を生かせる範囲で何かをする。もう一つ大事なことは、世界で起こっていることに関心を持つこと。

私は、びっくりしました。最初の文は私に今のままでいいのだと励まされたようでうれしかったのですが、二つ目の文は、毎年駆けつけてくださっているアグネス・チャンさんから学んでいることだったのです。彼女の口からもれる飢えや戦争など世界各国の悲惨な状況はいつも私たちの胸につきささっていました。

私は、この五年間、いろいろ悩んだり、感動したり、様々なことを勉強させていただいた気がします。私だけでなく、多くの参加者がたった二回のイベントに参加しただけに終わらずそこからもっと深い幅広い知識、感動を得られたと思います。

これからも遠くで私たちを見守っていてください。いつまでも夢を持ちつづける私たちでありますから。

平成十二年六月十一日

キャンペーンの経緯

歯の金属冠リサイクルで二十一世紀を担う子供たちの夢を育み、恵まれない子供たちへの福祉にも役立てようと、一九九四年（平成六年）福岡市で始まった「夢みるこどもキャンペーン」（主催　夢みるこども基金＝理事長臼田貞夫日本歯科医師会会長）が今春で満六歳を迎えました。

このキャンペーンは、日本歯科医師会の全面的なバックアップや、厚生省などの後援でスタートしました。これまでに四十七都道府県の一七〇七件の歯科医院、大学病院、関係医療機関が参加、寄せられた浄財は、一億八千万円を超えました。

これらの貴重な浄財をもとに、「私がかなえたい夢」をテーマに作文やイラストを公募、春休みに「こども会議」を開き、夏休みに行われる「夢のイベント」を決定しキャンペーンを展開してきました。

第一回目は、阪神大震災の孤児たちを励ます「阿蘇こども出会いの里」、二回目は、難病を抱えた筋ジスバンドを招いた「阿蘇こどもみどり村」三回目は、基金初めての海外事業として、バングラデシュに「夢みるこども基金学校」を建設、現地から二人を招き「世界のこどもと手をつなごう」のイベントを開きました。そして四回目は、キャンペーンの輪を広げるため、市民の方々と一緒にラブウォークし「夢の放送局」を開局して、夢や意見を発信しました。また、節目となる五回目の昨年は「ケーキがつなぐ友情の輪」をタイトルに巨大ケーキを作り、施設などに贈りました。今年は、「アフリカの大地に根付け　こどもたちの願い」と題しまして、内戦により厳しい環境に置かれているアフリカ・スーダンに食物の種子を贈るためこどもたちが育てて収穫。世界の子供たちを招き「世界こども音楽祭」も開催しました。また、イベントで作った竹細工を翌日、施設に届けました。

当基金では、イベントばかりではなくネパールで歯科医療活動を続けている歯科医師のグループやボランティア団体などへの寄付も続けています。しかし、私たちの最終的な目標は、世界中にキャンペーンの輪を広げ、子供たちから寄せられる小さな夢から大きな夢までをできるだけ多く実現していくことです。

歯科医院の先生方を始め、一人でも多くの方たちのお力添えをいただきキャンペーンの輪をもっともっと広げ、大人も子供たちと一緒に夢を見たいと思います。

皆様の一層のご協力、ご支援をお願い致します。

第1回イベントの開会式で夢みるこども基金の旗を上げるこどもたち（熊本県久木野村で）

キャンペーンのあゆみ

H 5.	6.22	第1回準備会
H 6.	2.14	キャンペーンスタート
H 6.	4.22	マスコットキャラクターの愛称「はっクン」に決定
H 6.	12.29	第1回「こどもの夢」作文・イラスト募集
H 7.	3.29	キャンペーン推進組織「夢みるこども基金」設立
H 7.	4.2	第1回こども会議（福岡県歯科医師会館・大ホール）
H 7.	7.27	第1回イベント「阿蘇こども出会いの里」開催（熊本県・久木野村）
H 8.	1.1	第2回「こどもの夢」作文・イラスト募集
H 8.	3.24	第2回こども会議（福岡県歯科医師会館・大ホール）
H 8.	3.26	神戸市にクスの苗木、ピースばらを贈呈、植樹
H 8.	5.18-19	九州デンタルショーに出展（福岡国際センター）
H 8.	7.25	第2回イベント「阿蘇こどもみどり村」開催（熊本県・久木野村）
H 8.	11.9-10	九州歯科医学大会に出展（熊本県）
H 8.	12.10	第3回「こどもの夢」作文・イラスト募集
H 9.	4.6	第3回こども会議（アクロス福岡・国際会議場）
H 9.	5.17-18	九州デンタルショーに出展（福岡国際センター）
H 9.	7.21	第3回イベント「世界のこどもと手をつなごう」開催（福岡市中央区・大手門会館）
H 9.	10.25-26	九州歯科医学大会に出展（鹿児島県）
H 9.	12.10	第4回「こどもの夢」作文・イラスト募集
H10.	4.5	第4回こども会議（アクロス福岡・国際会議場）
H10.	5.16-17	九州デンタルショーに出展（福岡国際センター）
H10.	7.25	第4回イベント「夢の放送局」とラブウォーク開催（福岡市博多区・キャナルシティ博多）
H10.	10.10-11	アジア パシフィッククリニシャンズ デンタル ミーティングに出展（福岡市・エルガーラ7F）
H10.	10.24	九州歯科医学大会に出展（宮崎県）
H10.	12.10	第5回「こどもの夢」作文・イラスト募集
H11.	3.28	第5回こども会議（福岡県歯科医師会館・大ホール）
H11.	5.29-30	九州デンタルショーに出展（福岡国際センター）
H11.	8. 8-9	第5回イベント「ケーキがつなぐ友情の輪」開催（熊本県南関町）
H11.	12.10	第6回「こどもの夢」作文・イラスト募集
H12.	4.2	第6回こども会議（あいれふ10階・講堂）
H12.	5.13-14	九州デンタルショーに出展（福岡国際センター）
H12.	8.6	第6回イベント「アフリカの大地に根付け こどもたちの願い」（福岡県宇美町）

これまでの夏のキャンペーン

H7.7.27　第1回　―阿蘇こども出会いの里―

熊本県久木野村にて開催。阪神大震災で両親を亡くした子供たちを阿蘇に招きホームステイ。こども会議のこどもたちや地元のこどもたちと大自然に触れ、交流を深めた。

H8.7.25～27　第2回　―阿蘇こどもみどり村―

熊本県久木野村で開催。こども会議のメンバー18人、筋ジストロフィーの少年ら26人、阿蘇宿泊先の子、理事らを含め総勢約200人が参加。雄大な自然の中で交流を深めた。

H9.7.21～22　第3回　―世界のこどもと手をつなごう―

福岡市中央区の大手門会館で開催。こども会議のメンバー16人、筋ジストロフィーの少年ら20人、バングラデシュのカラムディ村から3人、関係者も含め総勢約150人が参加。カラムディ村に「夢みるこども基金学校」建設資金を贈呈し、またネパール歯科医療協力会にも活動資金を寄贈した。

H10.7.24～25　第4回　―夢の放送局―

福岡市博多区キャナルシティー博多で開局。また、福岡市中央区天神のふれあい広場を出発点としてキャナルシティーまでラブウォーク。一般市民を巻き込んで、バングラデシュの学校への教材費のため募金を集めながら歩いた。昨年に引き続き、ネパール歯科医療協力会へ活動資金を寄贈した。

H11.8.8～9　第5回　―ケーキがつなぐ友情の輪―

熊本県南関町のセキアヒルズで開催。5年前に熊本県阿蘇での第1回目のイベントに参加したこどもたちやホームステイ先の方々なども一緒になって大きなケーキ作りに挑戦。出来上がったケーキは次の日児童養護施設へプレゼントした。

H12.8.6　第6回　―アフリカの大地に根付け こどもたちの願い―

福岡県宇美町の農家・松田好充氏宅にて開催。内戦で苦しんでいるアフリカ・スーダンに贈る食物の種子を収穫し、古着とともにユニセフへ贈呈。その後、竹トンボ、竹馬を作りこどもたち全員で遊び、翌日、児童養護施設和白青松園に贈呈した。また、「世界こども音楽祭」を開催。

都道府県別参加登録 歯科医院内訳

都道府県	数	都道府県	数
福岡県	498	長野県	10
大分県	202	三重県	9
鹿児島県	145	岡山県	7
山口県	103	広島県	7
東京都	90	青森県	6
長崎県	72	山梨県	6
神奈川県	65	石川県	5
宮崎県	61	島根県	5
熊本県	57	香川県	5
佐賀県	58	愛媛県	5
沖縄県	33	山形県	5
北海道	30	岩手県	4
埼玉県	29	和歌山県	4
兵庫県	27	岐阜県	4
千葉県	17	滋賀県	4
大阪府	16	秋田県	3
茨城県	15	京都府	3
静岡県	14	富山県	2
新潟県	13	福井県	2
福島県	13	奈良県	2
群馬県	13	高知県	2
栃木県	12	鳥取県	1
愛知県	12	徳島県	1
宮城県	10		

平成12年8月現在　合計 1707件